

3：長期化した咳嗽例に胃食道逆流症(GERD)治療を施行した経験

松原英俊、田中努、西山順滋、三ッ浪健一（滋賀医科大学附属病院 総合診療部）

【目的】欧米では近年慢性咳嗽の約30%がGERDによるもので3主病因の一つになっているが、本邦ではまれとされている。今回GERDの診断的治療を行い、本邦での潜在罹患者数を再認識することを目的とした。

【方法】平成12年1月4日～7月19日に原則一週間以上続く咳嗽を主訴として当科を受診し、呼吸器系感染を示唆する所見がなく十分なインフォームドコンセントのとれた新患19例を対象とした。アンケート調査を行い、生活指導とともにラベプラゾールを中心とする薬物治療を行った。

【成績】経過の追えた17例は全例治療反応性があり、12例は16日以内に、うち4例は3日以内に治癒した。罹病期間1年以上の1例は10日で治癒、2年以上持続例でも36日目で著明改善をみた。慢性咳嗽患者の6例中5例は治療に反応した。治療には詳細な問診を採り十分な生活指導も不可欠であった。食道定型症状は5例に認められたにすぎず、咽喉頭症状を14例に認め、治療前診断はアンケートを用いても困難であった。少なくとも新患の長期化した咳嗽の23.5%が治療反応性を示した。

【結論】長期化した咳嗽にたいし、診断的治療を行い高率に有用性が確認でき、本邦でもGERDが関与している例が相当数存在することが明らかとなった。